

敬和学園大学と地域社会を結ぶコミュニケーション誌

KEIWA

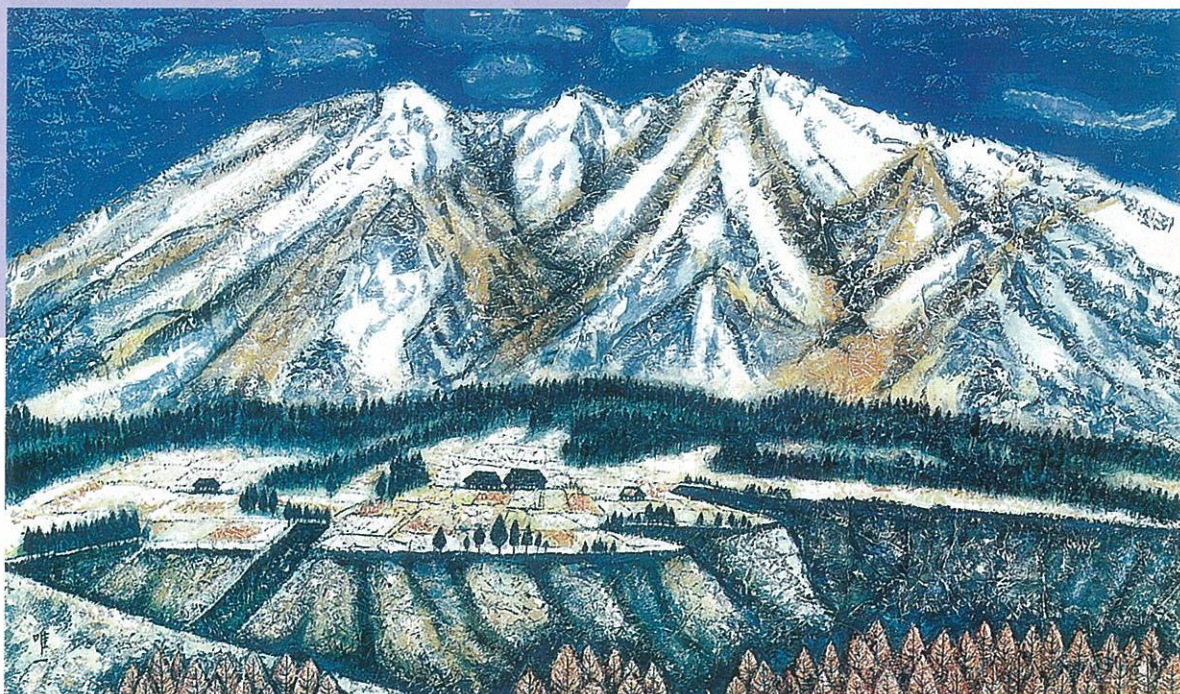
COLLEGE REPORT



第25号

〈JANUARY 2001〉

発行/敬和学園大学広報委員会



CLOSE UP

BBCテレビ番組制作顛末記 田中利幸

創立10周年記念特別講演会

2000年度公開講座

ストックウイン教授特別講演

イーデス・ハンソン女史敬和で語る

第10回敬和祭／新しい生活

ロシア極東ネットワークによる旅行について

日本英学史学会第37回全国大会

就職指導室より／2001年度入学試験中間報告

大学生大会を終えて／第9回学生リトリート

ゼミ紹介／同窓会だより／学会等出張

学事予告／寄付者ご芳名

2001

12月15日(金)に大学のクリスマスが行われました。特別養護老人ホーム「二の丸」でのキャロリングに始まり、礼拝、キャンドル・サービス(写真左)、県立新発田病院でのキャロリング、パーティーと盛りだくさんの行事に、学生、教職員、地域の方々がともに参加しました。また、12月初めから大学キャンパス内のツリーがイルミネーションで彩られています。正面玄関前のツリーは5限が始まる頃に点灯され、学生、教職員を見送ります。もう一本アネックス脇のツリー(写真右)は高さが11メートルほどあり、新新パイパスからもその美しい姿を望むことができます。



もくじ

BBCテレビ番組制作顛末記	日本英学史学会第37回全国大会	9
田中利幸	就職指導室より	10
1 創立10周年記念特別講演会	2001年度入学試験中間報告	11
2 ストックウイン教授特別講演	大学生大会を終えて 寒河江聡	12
田中利幸	第9回学生リトリート	12
3 イーデス・ハンソン女史敬和で語る	ゼミ紹介	12
倉谷雅也	同窓会だより	13
4 第10回敬和祭	学会等出張	13
5 2000年度公開講座	学事予告・寄付者ご芳名	13
6 新しい生活		
五十嵐万梨		
7 ロシア極東ネットワークによる旅行について		
吉田桃子		

<表紙> 安藤唯一「御岳の冬迫る」

(安藤司文 本学教授 お父上 日曜画家 画集「表象を描く」から)

BBCテレビ番組制作顛末記

教授 田中利幸



なぜ今戦争責任か？

九九年の師走、コンピュータをつけた私は、私の全く知らないマーティナ・バラゾバという東欧系の女性と思われる人からEメールが入っているのに気がついた。いつものように、VAWW (Violence Against Women in War) のメンバーからのニュースだろうと思いつつメールを開けてみた。VAWWとは女性に対する軍隊による暴力、とりわけ性暴力に反対する世界的規模の組織で、ボスニア戦争における大量強姦がきっかけとなって形成された。私も数少ない男性会員の一人だが、ほとんど毎日のように、世界各国の会員から新しい事件や

性暴力撲滅運動に関する情報がEメール網を通して流されてくる。

予想とは違って、Eメールの発信人は、英国の公営放送BBCのテレビ・ドキュメンタリー制作部の歴史部門で働く、アシスタント・プロデューサーであった。一九九六年にアメリカで私が出版した著作 *Hidden Horrors: Japanese War Crimes in World War II* を元に、年明け早々、テレビ・ドキュメンタリー番組の制作を開始したので、ついでは電話相談をしたい。電話番号を教えて欲しいという内容であった。実は、この数週間前にも英国の民間放送、チャンネル4からも同じような企画の申し入れがあったが、色々な経緯があって断わったばかりであった。私にとって不思議だったのは、なぜ今イギリスのメディアが、日本のアジア太平洋戦争期における行動に突然興味を示すようになったのかであった。現在も明確な答えを見いだしたわけではない。しかし、私の推測は次のようなものである。ヨーロッパにおける戦争責任問題は、犠牲者に対する賠償支払いを含め、ドイツの徹底した自己反省的政策によって一応カタはついて

いる。それに比較し、日本はいまだに様々な口実をつけて責任回避を行い、最近の「慰安婦」問題に対する政府の対処の仕方に典型的に現われているように、犠牲者に公的賠償金を支払う計画はいまのところ全くないのが現状である。こうした日本の状況を踏まえて、日本人は戦争責任についてどう考えているのか、日本人が戦時中に犯した様々な残虐行為について概観した上で考えてみようではないか、という雰囲気がある。欧米のメディアの中に出てきたのではなからうか。

私の意図と制作計画

その理由はともかく、自分の著作を下地に「世界のBBC」といわれる英国公営放送が四時間という長いテレビ・ドキュメンタリーを制作しようという計画に、実のところ私は最初半信半疑であった。とにかく急いで返信を送り、正月明けにはバラゾバ女史からメルボルの我が家に国際電話が入り、詳しくBBC側の計画を説明してもらった上で、私の意図を基本的に尊重するということが合意をみた。私の「意図」と

CLOSE UP

は、著作でも解説しているように、「日本人だけが戦争において残虐行為ができる特殊な人種」であると見なすような「日本人特殊論」に陥らないこと。しかしながら、私たちの父親の世代が犯した様々な犯罪行為はそれほど批判すると同時に、なぜ故にそうした残虐行為を日本軍は犯すようになったのかという原因を明確にすること、であった。また、BBC側の要求として、日米外交史の問題もドキュメンタリーに関わってくるので、この分野での権威者であるハーバード大学歴史学教授の江昭氏にもアドバイザーとして協力を依頼したいということであったので、私としても全く異存がないことを伝えた。

その後、話はトントンと急速に進み、最高責任者のプロデューサー、ローレンス・リーズから、詳しいプログラム制作計画書と、彼が数年前に制作した四時間のドキュメンタリー・シリーズ、「The Nazis: A Warning from History」(「ナチー歴史の警告」)という題の番組のビデオが送られてきた。このナチに関する番組は、それまで未公開であったロシア側の戦争当時のフィルムをふんだんに使った傑作であり、さすがはBBCと感嘆せざるをえなかった。私はこれまでABC(オーストラリア公営放送局)やNHKが制作した戦争関係のテレビ・ドキュメンタリー制作のアドバイザー役を幾度か務めたことがあるが、これほど時間とお金をかけて問題を徹底的に掘り下げて作った番組には出会ったことがなかった。

二月にはバラゾバ女史がロンドンからメルボルンまで飛んできた。我が家で三日間、

朝から晩まで強行スケジュールでリーズ氏が私の本を下地に作った制作計画書を、私がつけている情報と照らし合わせながら、徹底的に検討。この時点でBBCが最も確認したかった事項の一つは、インタヴューをする当事者の名前と住所のリスト・アップであり、おおかた問題はなかったが、香港で日本軍に強姦された英国人看護婦たちの名前と住所は私にはどうやって見つけだしてよいか全く見当もつかないし、おそらくは生存されている方もほとんどいないのではないかと考えられた。しかし驚いたことには、私が提供したごくわずかな情報を頼りに、それから数カ月後にはBBCは生存者の一人が、戦後、南アフリカに移住し今もそこに住んでおられるのを見つけた。五月には撮影チームが南アフリカまで飛んでインタヴュー録画に成功している。このBBCの情報網と完璧主義的な仕事の進め方には、私は驚くと言うよりはあきれかえってしまつて言葉も出なかった。

ところでアシスタント・プロデューサーのバラゾバ女史のことであるが、直接会って一緒に仕事をしてみると、彼女が単なるジャーナリストではなく、非常に洞察力の深い学術的な能力を備えていることにすぐに気がついた。しかも、私の妻が本気で心配するほどの美貌の持ち主である。若い美人の彼女が、白髪がまじった「オジン」の私に魅力を感じる可能性はほとんどないと思われるので、妻の心配は全く無駄であるが、それはともかく、彼女の経歴を尋ねてみると、生まれはスロバキアで、両親ともに医学者、特に母親はチェコスロバキアで屈指の産婦人科医で、プラハ大学教授。彼女

もプラハ大学でジャーナリズムを専攻し、当時まだチェコスロバキアは共産圏下にあったため西側への外国留学は困難であったところから、卒業後キューバに数年留学し入り、キューバの放送ジャーナリズムに関する論文で博士号を取得した。彼女の名刺にはPhD博士号のタイトルが使われていないので、どうして使わないのかときいてみると、共産圏の大学における「博士号」は西側諸国の大学の博士号とは比較にならないほどレベルが低いので、恥ずかしくて使えないという謙遜な答えであった。その後、彼女とはほぼ一年間電話とEメールを使って一緒に仕事をし、撮影旅行でも数週間日程をともにする機会が数回あったが、彼女の謙虚さ、頭の低い態度には本当に感心させられた。共産政権崩壊後、間もなく彼女は国連の情報関係の仕事につき、ボスニア戦争では国連平和軍の戦車やトラックに乗って国連に提出するニュース・フィルムの制作に当たったという。おそらく国連軍の将兵たちにとって彼女の美貌はたいへんな魅惑であり、その行動は脅威であったにちがいない。ボスニア戦争が一段落した後、彼女はロンドンに移り、その後色々なBBCのテレビ・ドキュメンタリー番組制作に加わっている。しかし、彼女のポジションはプロジェクトごとの契約仕事で、正規のBBCスタッフではないという不安定な状況にある。彼女は、まさに「グローバリゼーション」が持っている「国境の希薄化」と「職業の不安定さ」を代表するような存在である。

CLOSE UP

撮影からフィルム編集へ

バラゾバ女史と私が練り上げた計画書に沿って、四月からアメリカ、オーストラリアでの撮影、五月はすでに述べたように南アフリカ、六月は東京・沖縄、七月下旬から八月上旬にかけては中国(南京)・香港・北ボルネオと、まさに世界を駆けめぐるような旅行をBBCの撮影チームはこなしただ。私も、アメリカ、南アフリカ、沖縄、南京を除く地域での撮影にはアドバイザーとして参加。北ボルネオでは、ほんのわずかではあるがインタヴューで顔を出す場面もある。実は、私自身はあまりぶざまな姿を見られたくないので、かなり出演抵抗を試みたのだが、最終的には圧力に耐えられなくなり屈服してしまった。撮影チームとは言え、プロデューサー、アシスタント・プロデューサー、サウンド・テクニシャン、カメラマンの四人と私、それにそれぞれの現地で車の手配や通訳としてコーディネーター業務をこなすために雇った「助っ人」が一人、合計六人である。幸いなことに、チームの全員がとてつもない人達で、もちろん色々問題は起きたが、いつも皆が助け合っただけで無事に仕事をこなしていった。撮影旅行中の楽しみ、とりわけ北ボルネオのジャングルの中の文字どおり汗を流すような蒸し暑さの中での撮影を終えた後の楽しみは、皆でビールを飲みながらその日色々苦労したことを「冗談話し」に変えてしまい、笑いがあつて翌日のための精気(と正気)を養うことである。撮影の時は言葉に表現できないような緊張感がチーム全体を覆う。プロデューサーのリーズ氏は、徹底した完璧主義者で、自分が納得するまで同じ場面を何

度も何度も撮り直すため、一日が終わると皆くたくたなのである。実際に番組に使われるフィルムの長さは、撮影した全フィルム量の二割にもならないのではないかと私は推測する。

撮影期間中に、BBCの競争相手であるチャンネル4の番組制作に関する情報が入り、チャンネル4もBBCの番組を念頭にに入れて、来年早々の放送予定で同じような内容の番組制作を急いでいるということがわかった。そのため、BBCもまた番組完成を急がせなくてはならなくなった。最初の計画では一時間番組の四回連続、合計四時間を今年後半から来年前半にかけてじっくり作り上げる予定であったが、急遽予定を変更して各一時間番組(実質は五十分)の二回連続、しかも放送予定日を大幅に繰り上げて二〇〇〇年十二月四、五日の夜九時とすることに決定。正直なところ、私は少々がっかりしたが、視聴率を考慮に入れた放映タイミングに関するテレビ局側の都合もあるのだから仕方がない。

九月中旬から本格的なフィルムの編集が始まり、十月からは編集フィルムにあわせる形でのスク립ト作りが開始された。ここまでくれば私の出る幕はもうあまりなからうと思っていたのが、素人の浅はかさ。フィルムに合わせて短い秒単位でコメントをアナウンサーが読み込んでいくため、そのコメントのスク립ト作りがたいへんなのである。例えば、日露戦争以降なぜ日本の社会全体が軍事化し、このことが軍隊内部の暴力化につながっていき、最終的に太平洋戦争に広範に見られるような日本軍の残虐性を生み出したのか、という私が最初

に書いたスク립ト案はとてつもなく長く使えたものではなく、十分の一以下に短縮しなくてはならない。そんなことは、私にとつては不可能である。

元々のスク립ト案でさえ、私にとつては全く短すぎて不十分なのである。最後には、「そんなに簡単に一言でこの問題が説明できたなら、僕はこれまで十五年間もかけて研究する必要はなかったよ!」「それから自分で書いてみてください!」などと電話でリーズ氏と喧嘩腰のやりとりである。リーズ氏も私を融通のきかない古風な歴史学者と思つたに違いない。そんなわけで、その後、コメントの一語一句をめぐってさまざまな量のEメール、国際電話の応酬がロンドンと新発田の間で十一月十日まで続けられた。国際電話での最後のやり取りは十一月十日の深夜十一時半であった。時差の問題があるので、ロンドンから私に国際電話が入るのはたいてい夜十時過ぎ。ある晩などは夜十一時に電話が入り、終わったのが〇時半という状態で、「もういいかげんにしてくれ」と夢にまでうなされる夜もあった。

現在この原稿を書いているのは、実は十一月十二日、敬和祭が終わったその夜である。明日、十一月十三日からはナレーションの録音が始まり、十一月二十日に全てが完了。すでに述べたように十二月四日、五日の放送予定である。題名は、私の本の題名をもじって、「Horror in the East」(「東部の恐怖」)。これはリーズ氏が考えたものであるが、果たして英国の視聴者の反応は如何なものであろうか。

名誉教授称号及び名誉学位贈呈式 創立十周年記念特別講演会

創立十周年記念特別講演会

去る十月二十八日(土)に、小和田恆(財)日本国際問題研究所理事長及びドナルド・キーンコロンビア大学名誉教授をお迎えして、特別講演会を開催しました。

小和田先生は、前日二十七日の午前中に新潟県立新潟中央高等学校の百周年記念行事でご講演後、優美子夫人と一緒に宿泊先の月岡温泉においていただきました。キーン先生も同日午後の新幹線で新潟に到着後、宿泊先にお越しいただき、午後五時から大学運営委員会による歓迎会を開催しました。終了予定の午後七時を過ぎてても懇談が続き、三十分延長になるほどなごやかな歓迎会でした。



翌二十八日午前、小和田先生とキーン先生はホテルで仕事をされましたが、優美子夫人は、新発田市内の「石崎邸」、「清水園」、「雅子妃殿下御父上誕生地の地」、「落谷虹児記念館」を見学されました。



講演会は、午後二時三十分から聖籠町町民会館で開催されました。小和田先生からは、「世界の中の日本」という題で講演をいただきました。グローバルゼーションとつかつてない大きな波が地球全体を覆っている中で、現在の日本の様々な困難をいかに乗り越えればいいのかについて論じられました。七十分の予定時間を十分以上超過するほどの熱のこもった有意義な講演でした。以下はその講演の主な内容です。

従来は、一国の内政上で解決できた問題が、グローバル規模で考えなければならなくなっています。日本が解決していかなければならないのは、次の三つの問題です。

第一に国際社会の一員としての社会的責任です。第二次世界大戦の敗戦により、日本では従来の価値観が全て否定されました。戦後、「二度と他人に迷惑をかけない」という価値観が日本全体を支配してきました。しかし、グローバル化が進んだ今日、その原理より一歩進んで、「世のため、人のため、隣人のために何ができるか、国際社会の一員として、どう社会的責任を果たすのか」が重要なことになっていきます。

第二に、百五十年間の近代化の歪みを是正するという問題です。欧米の価値観を絶対視し、無条件に受け入れるのではなく、それらの正しさを認めただ上で受け入れ、間違ったところは改善し、より人類の普遍的原理へと近づくことが必要なのです。

第三に世界秩序構築への参加です。従来国際秩序の枠組みの中では、内政不干涉が大原則でした。しかし、世界政府が存在しない以上、世界の主要プレイヤーが一緒に、世界秩序をどう維持していくかを協力して考えていかなければなりません。日本もその主要なプレイヤーの一員として、世界秩序維持のための枠組み作りにも積極的に協力していくかがこれからの「世界の日本」に課せられている最大の課題です。

その後十分間の休憩をはさんで、キーン先生に「日付変更線を越える私」という題で、今年完成した『明治天皇』というご著書にまつわるエピソードをユーモアを交えてお話いただきました。以下はその概要です。

今まで明治天皇の伝記はほとんどありませんでした。このたび英語版と日本語版を同時出版しました。おもしろいものにしようと思ったのですが難しい仕事でした。それは当初、資料を見つけることができなかつたからです。明治天皇は日記も書かず、手紙も事務的なものが三、四通しか残っていないからです。詠んだ歌は十万首ありま

るようじ、
「界線を越える私」
ドナルド・キーン 先生



すが、それも天皇の人間味を伝えてくれるのはいいがたいのです。また天皇の側近たちもまるで口止めされているように何も語りませんでした。侍従も後にいくつかの思い出話を残していますが、断片的なことしか語っていません。

しかし、以下のことから明治天皇は忍耐強かったことがわかります。それは真夏の籠での移動で、中が非常に暑くなっても、決して正座を解かなかったこと。日清戦争中、広島の本営の仮住まいには一部屋しかなく、増築を勧めても、身の回りの世話をする官女を呼ぼうとしても、戦争に行っている人たちのことを考えてことわったこと。皇后が天皇の住まいから徒歩十分のところまで来ていたのに、同じ理由で一度も会いにいかなかったこと。天皇の次男が亡くなった知らせが会議中に届いても席を立たなかったことなどです。

伝記を書く人は、対象人物に惚れなければならぬといわれていますが、明治天皇に惚れることはなかなか難しいことでした。しかし、どうして彼の伝記を書いたのかといえは、書くことを決心した頃の心境を申し上げなければなりません。二十五、六年間、日本文学の歴史の執筆に没頭し、それが極めて面白い勉強だったので、執筆が完成した時は、伴侶を亡くしたような心境になりました。これを第一のライフワー

クの完成とするならば、第二のライフワークに取りかかることをしなければならぬと思いました。そこで、不思議な時代だと感じていた明治時代を代表する人物、明治天皇の伝記を文学的に書こうと思ったのです。そこで再度調べたら、『明治天皇記』という宮内庁が五十年かけて集めた十三冊に及び、素晴らしい資料があることがわかりました。一万ページを読破、事実に基づき、人間としての明治天皇を書き上げたのです。彼の評価が高い理由は、絶対的な権力を持っていたにも関わらずそれを悪用しなかつたこと、庶民に対し偏見を持たなかつたこと、周囲の人たちの操り人形ではなく、正しいと思つたことははっきりと意見を言つたこと、があげられます。

『明治天皇』執筆という第二のライフワークを終え、第三のライフワークを考えているところです。

講演後、小和田先生と優美子夫人にもステージにお上がりいただき、大学から花束をお贈りし、盛大な拍手をもって終えることができました。

この講演会を盛況のうちに無事終了することのできたのは、聖籠町および新発田市の関係各位のお陰です。この場をお借りして心から御礼申し上げます。



名誉教授称号及び名誉学位贈呈式

講演に先立ち、午後一時から、昨年三月に定年退職された伊藤豊治、菅野浩、サンフォード・ゴールドSTEINと当日欠席された田原嗣郎、片桐邦郎、孫野義夫の六人の先生方に名誉教授の称号が贈呈されました。これは本学として初めてのことでです。この六人の先生方は、大学設立当時、要職にあつて、基礎造りにすばらしい功績があつた方々です。特に、伊藤、田原両先生には、大学の設立申請の際、直接文部省に向向いて折衝をしていた



その後、引き続き、小和田恆先生とドナルド・キーン先生に名誉文化博士号の贈呈がありました。小和田先生は新発田市生まれ。特命全権大使国際連合日本政府常駐代表及び安全保障理事会議長を務められたこと、東京大学、ハーバード大学、ニューヨーク大学、コロンビア大学で教壇に立たれ、また優れた著書や論文があることを評価しての贈呈でした。キーン先生は海外における日本文学研究の第一人者であり、『日本文学の歴史』全十八巻に代表される数多くの著書が高く評価し、さらに翻訳家として、また能楽の研究家として海外に日本文化を伝えている業績を高く評価したものでした。これで本学が名誉学位を贈呈した方は九人になりました。

ストックウイン教授

特別講演

国際文化学科教授

田中 利幸

去る九月二十六日、オックスフォード大学、聖アントニー・カレッジ教授のアーサー・ストックウイン先生をお招きして、「日本の政党政治―時代遅れか、それとも改革への鍵か?」という題で特別講演をしていただきました。講義室は学生、教員で満席の状態となり、日本政治を専門分野にしておられる外国人研究者がどのように現在の政党政治を見ておられるのかを知ろうという意欲がうかがわれました。予測したとおり、先生の現代日本政治分析はかなり厳しい批判を含むものでした。

ストックウイン先生はオックスフォードを卒業された後、一九六〇年代初期、まだ日本研究を専攻する外国人留学生が数えるほどしかいなかった時代、留学生として二年ほど東京に滞在されました。その後、長くオーストラリアと日本の両国で研究職や教職に従事されました。一九八〇年代初期にニッサン自動車会社の寄贈でオックスフォード大学に「ニッサン日本研究所」が設立された時、その所長のポストにつかれ、今も所長をしておられます。六十年安保闘争時代に留学生生活を東京で送られたせいで、どうか、博士論文のテーマに日本社会党の政策分析を選ばれ、六八年にはその研究成果が単著として出版されています。また、先生が当時収集された社会党の貴重な内部資料がオーストラリア国立図書館に所蔵さ

れています。

私が、直接先生にお会いしたのは一九九五年が初めてでした。その年、第二次大戦終結五十周年記念として、フランスのノーマンディーにあるコーン平和博物館で開かれた学会に私は講演者の一人として招かれました。これを耳にされたストックウイン先生が、フランスの学会の後でオックスフォードまで来ないかと私を誘ってくださいました。ニッサン日本研究所での私の戦争犯罪に関する講演には、日本軍の元捕虜や捕虜として亡くなられた遺族の方々が出席され、講演後いろいろと熱心に質問を受けたことは今も忘れられない思い出となっています。

イーデス・ハンソン女史敬和で語る

十二月五日の二限に新発田館三十一番教室で、イーデス・ハンソン女史(アムネスティ・インターナショナル日本副理事長)の「国際化と人種―アムネスティの活動から」と題する講演会が開かれました。学生、教職員、一般市民約二〇〇人が熱心にハンソン女史のお話を耳を傾けました。延原時行教授が一部関西弁で講演者を紹介されたあと、女史は大略次のように話されました。「人権というと難しく響きますが、国際化は日本国内至る所で聞かれる言葉です。私は和歌山県の田舎に住んでいます。そこですら国際化、国際化と言っています。それはどうやら外国人と言葉がかわせるということを意味しているようですが、本当の国際化は、言葉を使って何を伝えるかです。



犬には猫の心がわかりません。猫にはネズミの心がわかりません。しかし人間には想像力があるので、他人の心がわかります。他人のことを思いやる心、これが人間の特権なのです。

私は子どものころインドで育ちました。当時インドでヒンズー教徒とイスラーム教徒が殺し合いをする場面を見て、大変なショックをうけました。私の国アメリカにも黒人差別がありました。その後日本に来てみると、ここには在日朝鮮人に対する偏見や部落差別というものがあることがわかりました。日本では宗教も、肌の色もちがわないのに、差別されて苦しむ人びとがいたのでした。

私がアムネスティの仕事をするようになったのは、こうしたインド、アメリカ、日本での体験を通して、差別をなくすためにすこしでも役立ちたいと願うようになったからです。

女史の関西弁には説得力があり、その態度は「対決姿勢」でなく、心の通じ合いを求める人間的なものでした。この講義は敬和学園大学十周年記念特別講演として行われたことを付け加えておきます。

第十回敬和祭

敬和祭実行委員長 倉谷 雅也

去る二〇〇〇年十一月十一日(土)、十二日(日)に第十回敬和祭が行われました。第一日目は、前日から降り続く雨で一時は、屋台の出店を見合わせようかと考えてくるくらいの悪天候でしたが、回復し、無事に出店することができました。やきそば、たこ焼き、おでん、チョコバナナなどのアイソドックスなものはじめ、チャーハン、イカチーズ焼き、ブリトー(小麦粉で作った皮の中に色々なものを詰めたメキシコ料理)など一風変わった屋台も出店され、どこも大盛況で、即日完売でした。



また、その屋台前に作られた特設ステージでは、いろいろな企画が催されました。中でも「目指せ最強コンビ」という企画は、盛り上がりを見せていました。この企画は、恋人、友達、親子、兄弟などでコンビを組んでもらい、様々な難関を二人の知恵と協



力によって乗り越えていくというものです。この企画には、敬和学園大学職員や大海教授夫妻といったチームも出場し、会場を大いに盛りあげていただきました。ちなみに、最強コンビは、大海教授夫妻チームとなり、大海教授の普段の授業とは違った一面を見ることができました。

この日には、第十回敬和祭のメイン企画であるサッカー・フェスティバル二〇〇〇のサッカー教室が行われました。元日本代表選手であり、現在はJリーグの解説や、テレビ、新聞等で幅広く活躍している松本安太郎氏を講師にお迎えし、小学生を対象にサッカー技術と精神面での向上を図ることを目的として行われました。会場には学生をはじめ様々なお客様が集まり、松本氏の見事な指導に見入っていました。また、このサッカー・フェスティバル二〇〇〇は、二日間にわたって開催され、サッカー



教室のほかにはフットサル大会が行われ、出場選手たちは、日頃の練習成果を遺憾なく発揮し、どのチームも全力でプレーしていました。初日はこのほか、インディーズ・アイドルユニット「C's」のコンサートや「Float」という三人のDJによるクラブ企画なども行われ、敬和祭を盛り上げてくれました。

二日目も非常に冷え込む中、多くのお客様にご来場いただくことができました。敬和の学生や卒業生などによる学生ライブでは、様々なジャンルのバンドが出演し、自分たちの腕を披露していました。そして、この記念すべき第十回敬和祭最後の企画である後夜祭では、第一部に「LOUDNESSのコーポレーション」のライブ、第二部に立食パーティーとビンゴ大会を行いました。ビンゴ大会では、一等賞品がテレビという大盤振る舞いで、大盛り上がりの中に敬和祭を終えることができました。

最後に、ご参加、ご協力いただきました教職員の皆様にお礼を申し上げるとともに、ご来場いただきましたお客様に心より感謝を申し上げます。

二〇〇〇年度公開講座

二〇〇〇年度公開講座は、聖籠町、豊栄市、新発田市、三条市の計四市町で開催しました。

五月に終了した聖籠町の公開講座は、十三名の方々が参加され、「これからの地域社会とは」をメインテーマに、さまざまな視点から「地域社会」をとらえました。七月に行われた豊栄市での公開講座は、今年初めて実現したものです。五〇名を超える参加者を迎え、豊栄市が近年特に教育に力を入れ取り組んでいることから、「育もう子どもたちを」をメインテーマに行われました。

新発田市での公開講座は、「コミュニケーションについて考える」をメインテーマに、八月二十五日から十月十三日の毎週金曜日に新発田市生涯学習センターで開催しました。例年八回で行っていますが、本年度は創立十周年記念特別講演会開催のため、二回少ない七回での講座となりました。メインテーマが、コミュニケーションという身近なテーマということもあり、新発田市民を中心に新潟市、豊栄市、笹神村および紫雲寺町から六十三名の方々に出席いただきました。

各講座は、「親と子」や「夫婦・家庭」でのコミュニケーションという身近なものから、「IT」コミュニケーションまで広範囲にわたりました。四回目は、新発田商工会議所副会頭で工学博士でもある渡辺幸二郎氏による「歴史が語る町づくりとコミ

ュニケーション」と題した講演でした。城郭を平面図で見たときの不整合度を数字で示したり新発田とその他の城下町の都市計画を比較したとてもユニークなものでした。六回目の十月六日は、パネルディスカッション形式で、時間を三十分延長し十九時から二時間で行われました。「異文化コミュニケーション」をテーマにした基調講演のあと、三名のパネリストによるディスカッションが行われ、それぞれ異なる経験に基づいた話に、受講生は大いに引きつけられたようです。「パネリスト



の話が最後まで聞けなくて残念でした」、「パネルディスカッションの回数をもっと増やしたい」という声もありました。最終日の十月十三日には、閉講式が行われ、全回出席された二十七名の方に北垣学長から直

接修了証が渡されました。また、三条市公開講座が、十一月二十一日から十二月十二日の毎週火曜日に三条市中央公民館において行われました。三条市での開講は、初めての試みでしたが、この地域からは、多くの学生が入学していますが、

下越地区にある本学のイベントに中越地区から参加するのは難しく、交流の機会が今までほとんどありませんでした。そこで今回、中越地区の皆さんにもっと敬和に親んでいただくため企画したのがこの公開講座です。四十五名の受講生が集まり、皆さんとても熱心に取り組んでいました。メインテーマは、三条市からの要望もあり、新発田市で行ったものと同じ「コミュニケーションについて考える」で、四名の本学教



員がそれぞれの専門の立場から講演しました。最終回の十二月十二日の講座では、田中利幸教授が実体験に基づいた「女性観」について講演されました。結婚するときは、約束ごとや取り決めにしてお互いに納得するまで相談すること、「言わなくてもわかるだろう」という甘えを持たないこと、結婚後のさまざまな問題を解決するには相手を許すことが大切とユーモアを交えて話され、受講生の大きな共感を呼んでました。

最後に、会場を提供くださいました関係各位に、厚く御礼申しあげます。本学では、公開講座を今後とも開講していく予定です。二〇〇一年度の公開講座も、多くの皆様に参加されることをお待ちしております。

新しい生活

一九九九年卒業生 五十嵐万梨

こんにちは。今年の春に敬和学園大学を卒業し、今は日本を離れアメリカの大学院でコミュニケーションを勉強しています。早いもので、私がアメリカに来て半年が経ちます。高校時代に初めて留学を決意してから長い道を経て、ようやくこの地にたどり着きました。長い間はつきりとした留学目的を見つけることができなかつたのですが、敬和学園大学在学中にコミュニケーションという学問にめぐり会うことができ、今ここで勉強するに至っています。

私の学ぶミシガン州立大学大学院のコミュニケーション研究科はアメリカで一番古い大学院で、伝統と歴史がある研究科です。ここでは想像以上に幅広いコミュニケーションを学ぶことができ、コミュニケーションの多様さに驚いています。敬和でもこの春からコミュニケーション・コースが設立され嬉しく思っています。

ここでの生活は毎日が忙しく、慌ただしいままに時間が過ぎていくような気がします。文化の相違や英語での生活など大変なことはたくさんあるのですが、これからも前向きな気持ちでいろいろなことにチャレンジしていきたいと思っています。アメリカで勉強できることをとても幸せに思い、留学するにあたり協力していただいた先生方、そしていつも理解を示し協力的な両親に心から感謝しています。

ロシア極東ネットワーク による旅行について

英語英米文学科四年 吉田 桃子

外務省助成事業の「ロシア極東との研究交流ネットワーク事業」は、ロシア極東、新潟県内及び日本海沿岸地域の研究者を中心とする青年同士が、研究交流ネットワークを樹立させ、今後継続的・発展的に日ロ交流に資することを目的としています。

十月二十九日から十一月五日の一週間、この助成によるロシア極東視察旅行に参加しました。

私は、将来教員として働くことを目指しているの、見聞を広めるための願つてもないチャンスでした。研究者の研究への姿勢から学ぶことはたくさんあり、就職を控えた同年代の青年と交流を深めることもできました。ハバロフスクの教育大学では、日本語を専攻している学生との懇談会がありました。日本語の授業を千時間も受けている学生の流暢な日本語に驚き、日常的に、日本語で政治や経済、教育について意見交換を行う姿に圧倒されました。日本の四年制大学もカリキュラムを改革し、語学の時間数を増やして欲しいと思いました。また、ゼミでは、どうしてもコミュニケーションの仕方や自分の意見が相手に受け入れられるかどうかにはかなり気をとられるという私の癖に気づくことができました。

わずか一週間の短い滞在でしたが、今回学んだことをこれからの生活に生かそうと思えます。

日本英学史学会 第三十七回全国大会

九月三十日(土)・十月一日(日)の両日、本学会会場に、日本英学史学会第三十七回全国大会が開催され、本学からは、北垣宗治学長が実行委員長として参加されました。学会には、当日参加を含め六十六名が参加され、遠くは鹿児島や三重、岡山などの遠方からも来学されました。

第一日目は、午後一時三十分から開会式で、大会実行委員長である北垣学長の開会の辞で全国大会が始まりました。その後、「越の国(福井・石川・富山)の洋学」をメインテーマに三名の講師によるリレー式特別研究発表や日本歯科大学の博物館蒲原宏先生による「越後・佐渡の英学」と題した特別講演、最後に総会が行われ、学会活動報告や会計報告、豊田賞の発表などがありました。また、夕方六時からは、会場を新発田ベルナールに移して、懇親会を行いました。

第二日目には、十六人の学会員の研究発表が二部屋に分かれて行われ、学会員の皆さんは、興味のある研究発表の部屋に移動し、熱心に発表を聞かれました。

また、十月二日(月)には、新潟市内の史跡並びに資料の見学に十数名が参加しました。

(総務課総務係)

就職指導室より

二〇〇〇年度保護者との懇談会

去る九月三十日(土)、新潟市内のホテルにおいて、三年次生の保護者を対象に「二〇〇〇年度保護者懇談会」が開催され、本学教職員二十五名と保護者七十余名が参加されました。第一部では、まず大海就職委員長が、今年の就職環境は極めて厳しく、これは来年も続くものと覚悟し、早期から卒業後の進路を考え、準備を開始することが必要であると強調されました。また、本学としても様々な指導を行っていくが、それに加えて保護者の皆様方からも進路や就職の問題についてご理解いただくとともに、



に、学生の一番身近な社会の先輩として良き相談者になつていただきたいとお願いがありました。続いて柴沼教職課程委員から、新潟県における

教員採用試験の現状を踏まえた教員採用試験への取組みについて説明がありました。最後に石田就職指導室長から、今年度の就職状況と昨今の企業における採用活動の変

化を踏まえた就職指導の内容説明があり、学生自身が「やる気」を持って行動し、何よりも「自己分析」と「企業研究」をしつかりと行うことの必要性を強調して、第一部を終了しました。

第二部の懇親会は、石井後援会長の挨拶および乾杯の発声で始まり、教員と保護者の皆様との自由な懇談をおとして、就職活動のみならず、学業成績などについても十分に意見交換を行い、有意義な時間を過ごすことができました。

二〇〇〇年度企業との就職懇談会

毎年恒例の「企業との就職懇談会」が、去る十一月二日(木)、新潟市内のホテルで開催されました。業務多忙のなか、八十三社九十七名の人事担当者に参加していただき、



き、大学側からは北垣学長はじめ教職員二十五名が出席しました。まず、北垣学長が挨拶に立ち本年度の採用のお礼を述べるとともに、本学の就職



しました。

第二部懇親会は、新潟、新発田両商工会議所よりの祝辞、本学後援会の石井会長の乾杯で始まり、参加企業の人事担当者とは本学教職員の間で今後の就職問題などについて活発な意見交換が行われました。来年度の就職活動開始に向けて大きな弾みがついた懇談会でした。

三年次生がこれから迎える厳しい就職戦線に対し、本学としては一人でも多くの学生がより満足度の高い就職が出来るように万全を期すことはもちろんですが、保護者の皆様からもより一層のご支援とご協力をお願いいたします。

実績や取組みなどを企業の皆様にご理解いただきたいと強くアピールしました。続いて石川喜一教授から「生活習慣病について」と題し講演がありました。成人病とはほぼ同義語である生活習慣病に関して、データに基づく予防対策等を含めた詳細な説明に、改めて健康であることの重要性に気づかされました。また、石田就職指導室長から、来年度さらに厳しい就職戦線を迎える現三年次生に対しても本年度に引き続いての採用をお願いして第一部を終了し

二〇〇一年度入学試験中間報告

推薦入試が終わりました AO入試快調にスタート

二〇〇一年度の入学試験は例年より早く始まりました。と言いますのは、AO（アドミッションズオフィス）入試という新しい入試制度を導入したからです。

AO入試は二年ほど前にはほとんど知られていない入試制度でした。学力試験を課さず、複数回の面談と書類選考によって合格を決定するのが特徴です。しかし、ここに比重を置くかは各大学によって様々です。本学の場合は、面談Ⅰでは本学の教員が教育内容を説明し、大学の施設と一緒に見学します。面談Ⅱでは面談者の個性や関心、将来への希望などを語ってもらいながら、本学がその目標を実現できる場として適切であるか話し合います。その後両者が理解し合ったうえで出願が行われます。この面談の申込みは七月一日から今年三月三十一日までで、最初の面談は七月中旬に行われました。面談日は面談希望者の都合に合わせて随時受け付け、遠方の面談希望者の場合は出張面談も行っています。

AO入試による合格者は現在二十名とかなり、期待以上の反響に私たちは喜んでいますが、一人ひとり、一回の面談は三十分から一時間以上にもわたり、手間隙のかかる入試といえますが、面談そのものが「知的刺激が感じられる教育的時間になった」「生徒の熱意や人柄までも入学前に分かっている」という感想を先生方からいただいでい

ます。それと同様に、面談体験者も事前に大学を理解することができ、入学後の教育効果を高めることができます。入学後の教育私たちは、このAO入試が脱学力選抜に向けた大きな可能性を秘めていると実感しています。

さて、従来の入試ではまず十月二十一日（土）に編入学試験（第一次）と社会人入学試験が実施され、前者二名、後者一名の入学が決定しています。本学の編入学の特徴は、短大卒業見込みの人が四年制大学で専門の勉強を継続したいという一般的ケースに限らず、教員志望の人が教職課程（英語）を目指して進学していただくことです。

十一月二十五日（土）には推薦入学試験が実施されました。指定校推薦、一般推薦合わせて八十六名（英語英米文学科四十五名、国際文化学科四十一名）の受験生を迎えました。この推薦入学試験については慎重な審議の結果、受験生全員が合格と判定されました。推薦入試では、二〇〇一年度から一般推薦で併願が可能となったことが新しい点です。また、県外からの志願者が増えたことも嬉しいことでした。

これから下記の日程で、一般入学試験（A日程、B日程、C日程、センター入試）、編入学試験（第二次）が実施されます。みなさまのお知り合いに大学進学を考えている方がいらつしゃいましたら、是非本学をお勧めいただき、お気軽に入試室までご連絡いただけますようお願い申し上げます

（入試委員会・入試室）

お問い合わせはフリーダイヤル〇一一〇一六六―三六三七 入試室をご利用ください。大学案内・募集要項は送料とも無料です。

2001年度入学試験概要

AO入試		筆記試験を行わず2回の面接を通して入学を決める新しい入試制度です		面談申込期間は3月31日まで	
入試区分	出願期間	試験日	試験会場	試験科目	
一般	A日程：2科目型	1月9日（火）～ 1月25日（木）	2月 2日（金）	本学、新潟、 長岡、会津若松	英語（リスニング含む） 国語、調査書
	B日程：1科目型	1月9日（火）～ 1月25日（木）	2月 3日（土）	新潟	英語（リスニング含まず） 国語より1科目、調査書
	C日程：課題面接型	2月19日（月）～ 3月7日（水）	3月12日（月）	本学	面接、調査書
	センター入試	1月9日（火）～ 1月29日（月）	1月20日（土） 1月21日（日）		英語、国語、地歴、公民の 11科目より1科目、調査書
編入学（第2次募集）	2月5日（月）～ 2月16日（金）	2月23日（金）	本学	小論文、面接	

大学生大会を終えて

少林寺拳法部主将 寒河江 聡

十一月二十六日(日)に行われた第九回新潟県大学生少林寺拳法大会は、敬和学園大学が主管校を務めました。会場の確保から、資金集め、パンフレット作成などすべて少林寺拳法部の部員で準備しました。会場は、大学体育館を借用しました。全員が、リーダーの指示に従い、スムーズに準備をする事ができたので、前日の準備は二時間で終わらせることができました。

何日も前から、この日の流れをイメージしながら、スケジュールを確認してきました。しかし、当日は、朝から忙しく計画どおりにはいかないことがたくさん起きました。開会式では、主管校の主将である私が選手宣誓をすることになっていたので、そのことでも頭がいっぱいでした。

部員たちは、大会準備の仕事ももちろんありましたが、大会に選手としても参加するので、そのための練習も積み重ねてきました。その甲斐あって全員が、この大会で自分の力を出し切ることができました。主管校としての責任も無事にはたし、大会も無事に終えることができました。

私は、この大会に向けて、二年間主将を務めてきましたが、部員の協力のお陰で、無事責任を果たすことができました。今回の大会は私たち少林寺拳法部にとって、非常によい経験となりました。

第九回 学生リトリート

十一月十七日(金)～十八日(土)、新潟県下越スポーツハウスで開催された第九回学生リトリートには、十二名の学生と六名の教員が出席しました。石川喜一先生の「私の学生時代」、金山愛子先生の「アーモスト大学の思い出」を中心に、三回の礼拝も守り、和気あいあいと合宿を満喫しました。

以下は、高橋和幸君の感想です。
先生たちとじっくり話し合える機会でした。会場になった下越スポーツハウスの雰囲気は質素だったので、高級ホテルのようなどころよりもいいと思いました。

科学的な考え方が充満し、臨死体験のよくな一見非科学的なものが受け入れられにくくなったことは、人間の考え方をせばめているという石川先生の話には、とても驚かされましたが、興味をかきたてられました。ガン細胞を消す作用のあるNK細胞は、ちよつとした「やった」という達成感が作りだすそうで、心と体の間には密接な関係があることを知り、驚きました。
自由にお茶やコーヒを飲みながら談笑し、授業のように硬くない、本音の学問的な話を聞くことができました。普段の授業でもこのような雰囲気の中で話を聞くことができたらいと思えました。

(宗教部長)

ゼミ紹介

国際文化学科教授 神田より子

ゼミで学生たちに求めるのは、学問する喜びを実感してもらうことです。ゼミの二年間で経験したことが、卒業後にも実感できればいいなと思っています。その成果が学生時代に自分で築くことのできる知的財産になると考えるからです。

具体的には私の専門分野が文化人類学、民俗学なので、地域に入ってフィールドワークを行い、その成果を分析するのです。近頃は家族ともじっくり会話をしていない学生が多い中で、他人から話を聞かせてもらうわけですから、最初は緊張して大変です。聞いた話をノートに取れない、同じ新潟なのに方言がわからないというようなことから調査は始まります。そして資料を調べ、関連する文献を読み、地域の方々と仲良くなつてくると、いよいよ調査は活況を呈してきます。地域の現状や矛盾も見えてきて、学生たちが面白がるようになるのです。自分で調べたことは小さな事でも、それが全体の調査の中でどのような位置づけられるのかわかってきます。そうすると他の発表者への質問も熱を帯びてきます。ここまで来れば成功したも同然です。後はその積み重ねがどこまでできるかで、その成果に厚み加わるからです。
来年はどういうフィールドワークができるのか楽しみです。自分で考えて行動する、それが当たり前なゼミであり続けたいですね。

同窓会だより

同窓会長 米山 光紀

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。同窓会では、去る十一月十一日(土)に同窓会総会を開催しました。ようやく三回目を迎えた総会ですが、一九九九年年度活動・会計報告や二〇〇〇年度活動計画の報告といった内容をこなし、参加者が少なかつたので、それぞれの近況報告なども交えながら行われました。参加できない方から寄せていただいたコメントも紹介しました。今回の総会は、学園祭の開催期間中に、大学の新発田館三十二教室を借りて行いました。学園祭には、多くの学生が参加していて、とても活気があったように思います。卒業生の姿もそこに見られました。私もなつかしい先生方にお会いでき、楽しい時間を過ごすことができました。今後も年に一度、学園祭に合わせて総会を開催していきますので、今回残念ながら参加できなかった皆様も、昔の仲間と連絡を取り合つて参加してください。

同窓会では、今年四月から部室棟の一室をお借りして、同窓会室を設けています。同窓会活動の拠点として、電話(兼FAX)〇二五四―二七―二二五を備えています。皆さんの要望・お問い合わせはこちらにお願ひします。また、連絡・コミュニケーションの場として、ホームページを開設しました。アドレスは、<http://www.keiwa-c.com>です。掲示板への書き込みなど、自由にお使ください。

学会等出張

(二〇〇〇年十月一日～十二月三十一日分)

柴沼晶子教授

教育史学会第四十四回大会発表

十月一日(日)

埼玉・埼玉大学

益谷 眞助教

日本心理学会第六十四回大会発表

十一月六日(月)～八日(水)

京都市・京都国際会館

延原時行教授

日本ホワイトヘッド・プロセス学会

第二十二回全国大会発表

十月六日(金)～九日(月)

山口・山口県立大学

神田より子教授

慶応義塾大学地域研究センター

国際シンポジウム パネリスト

十月二十九日(月)

東京・慶応義塾大学

民俗芸能学会

東京大会シンポジウムパネリスト

十一月二十六日(日)

東京・日本青年館

田中利幸教授

オーストラリア国立大学での論文発表

十一月十七日(金)～二十五日(土)

オーストラリア・キャンベラ

松本ますみ助教

ロシア極東との研究交流ネットワーク参加

十月二十九日(日)～十一月五日(日)

ロシア・ウラジオストク、ハバロフスク

学事予告

◆一月◆

十六日 外国人留学生入学試験

十六日 後期講義終了

二十四日 後期末試験(～二月九日)

◆二月◆

二日 一般入学試験(A日程)

三日 一般入学試験(B日程)

十日 春期休暇(～三月三十一日)

◆三月◆

十二日 一般入学試験(C日程)

二十一日 卒業式

三十一日 学年終わり

寄付者ご芳名

一 般 小川文勝 本間 強

後援会 オレンジ会

日米北宣教協力会

一九九二組 下川 幹 渡辺大知

一九九四組 齋藤豪芳

一九九六組 斉藤洋美 須貝洋人

須田雄介 赤塚孝志



キャンパス日誌

9月

30日 日本英学史学会(～10月2日)

10月

- 6日 チャペル・アッセンブリー・アワー⑬
 説教 延原時行 宗教部長「ピューリタンの初心に学ぶ」
 講演 蔡 英愛 イエス長老教会総会神学大学教授
 「イエス文化を建てましょう」
 新発田市公開講座⑥(パネルディスカッション)
 基調講演 田中利幸 教授
 「異文化コミュニケーションと男女間コミュニケーション」
 パネラー 田中利幸 教授
 ジェームズ・ブラウン助教授
 中村義実 専任講師
 司会 松本ますみ助教授
- 11日 教授会、人事教授会
- 13日 チャペル・アッセンブリー・アワー⑭
 講演 橋原正彦 燕教会牧師
 「イエス・キリストを信じるということ」
 新発田市公開講座⑦
 講師 北垣宗治 学長「コミュニケーションとは」
- 20日 チャペル・アッセンブリー・アワー⑮
 説教 延原時行 宗教部長「イエスの教育改革」
 講演 田中利幸 教授
 「シドニー・オリンピック：アボリジニー達にと
 ってそれは何だったのか」
- 21日 帰国子女・社会人・編入学(一次)試験
- 22日 実用英語技能検定(受験者67名)
- 25日 教授会、人事教授会
- 26日 帰国子女・社会人・編入学(一次)合格発表
- 27日 チャペル・アッセンブリー・アワー⑯
 講演 松永堡智 新津福音キリスト教会牧師
 「静かに聞く」
- 28日 名誉教授称号及び名誉学位記贈呈式
 大学創立10周年記念特別講演会(聖籠町町民会館)
 講演Ⅰ 小和田恆(財)日本国際問題研究所理事長
 「世界の中の日本」
 講演Ⅱ ドナルド・キーン コロンビア大学名誉教授
 「日付変更線を越えるように文学と歴史の境界線を越える私」
- 30日 大学・高等学校連携協議会

11月

- 2日 企業との就職懇談会
 (ホテル新瀧)
- 8日 学園常務委員会
- 10日 聖籠町聖山大学来学(32名)
 (写真)



- ふれあいバラエティ(写真)
- 11日 第10回敬和祭(～12日)
- 17日 チャペル・アッセンブリー・アワー⑰
 講師 小淵康而 新潟信濃町教会牧師
 「人生を転換させる時」
 第9回学生リトリート(～18日)
- 20日 大学・高等学校連携協議会
- 21日 三条市公開講座①
 講師 北垣宗治 学長
 「親と子のコミュニケーション」
- 22日 敬和フォーラム⑱
 講師 石川喜一 教授
 「バイオエシックス(BIOETHICS)運動について」
- 24日 チャペル・アッセンブリー・アワー⑱
 講師 船本弘毅 東京女子大学長
 「この時代を生きるわたしたち」
 理事会・評議員会
- 25日 推薦入学試験
- 28日 三条市公開講座②
 講師 杉村使乃 専任講師
 「夫婦・家庭のコミュニケーション」
- 29日 教授会



12月

- 1日 チャペル・アッセンブリー・アワー⑲(写真)
 講師 目崎 薫 三寶寺住職
 「国際交流のプログラミング」
- 5日 特別講演会
 講師 イーデス・ハンソン(社)アムネスティ・
 インターナショナル日本副理事長
 「国際化と人権ーアムネスティの活動から」
 三条市公開講座③
 講師 中村義実 専任講師「異文化コミュニケーション」
- 8日 チャペル・アッセンブリー・アワー⑳
 説教 延原 時行 宗教部長
 「愛されて、許されて」
 講演 「キリスト教に関する学生の質問
 なんでもに教師が答える」
- 12日 献血
 三条市公開講座④
 講師 田中利幸 教授「男女間コミュニケーション」
- 13日 教授会
- 15日 クリスマス行事
- 16日 高等学校・大学クリスマス合同研修会
- 23日 冬期休暇(～1月8日)



1月

- 9日 講議再開